

## 資 料

## 青年期における自己像と自我同一性

松 田 君 彦\*

広 瀬 春 次\*\*

人間は乳児期から周囲の様々な人との接触をとおして、彼らから期待され、是認される自己像を自分自身の中に形成していくが、青年期になると、新たな経験としての性的成熟に直面すると同時に、これまでとは異なる大人の社会へ入っていく準備のため、それまでの種々の自己像や同一化の再統合に従事しなければならない。著しく不安定な自我、自意識過剰、反社会的行動といった青年期特有の諸現象は、自我同一性 (ego-identity) を形成しようとする心理的な葛藤・努力の現われとして捉えることができよう。

Erikson (1959) は、青年期の自我が同一性を確立する能力を失う結果として陥る同一性拡散 (identity-diffusion) の 8 つの徴候を生活周期に対応させることで明らかにしているが、砂田 (1979) は、この 8 つの部分症候を下位概念とする同一性混乱\*\*\* (identity-confusion) 尺度を構成し、これと長島の Self-Differential を応用して測定した自己の規範と社会 (家族・市民社会・国家) の規範の間にみられるずれとの関係を検討した。その結果、諸規範間のずれが同一性混乱をひきおこす 1 つの原因であることが示唆されたが、このように同一性あるいは同一性拡散といった複雑な概念を操作的に定義し、実証的に検討していくことは、その概念の客観性・公共性を高めるためにも必要なことであろう。

西平 (1970) の研究も、そのような試みの 1 つである。彼は、自我同一性を自己自身の性格および行動特性が社会的役割と一致しているという自己認知によって示そうと試み、高校生、大学生を対象に SD 法で測定された自分らしさと青年らしさの差異を自我同一性の指標としている。ところでこれと類似の指標が、前述の砂田の研究において、自分から見た現実の自己像 (私的な現実自

己) と社会から望まれる自己像 (社会的な理想自己) のずれを問題にすることで得られる。即ち、この場合の自己像間のずれは、規範間のずれの指標ではなく、自己が他者の期待にこたえているという自覚、あるいは自己の社会的是認の知覚といった自我同一性の重要な側面に関する指標とみなされる。当然、この種の自己像間のずれの大きい者ほど、同一性混乱は強いと考えられる。

一方、私的な現実の自己像と私的な理想の自己像のずれは、従来、その個人の適応の指標となることが論ぜられており (加藤, 1960)、一般的には、その差異の大きいものほど不適応の傾向を示すと言われている。また自我同一性と適応の問題に関して、Block (1961) は、自我同一性拡散の 1 側面である役割拡散と不安傾向として測定された不適応との関係を検討し、両者に有意な相関があることを見出しているが、Mercia (1967) の研究では、同一性達成の地位にある者と同一性拡散の地位にある者との間に、適応得点の有意な差異は認められなかった。しかし一般的には、自我同一性が達成された時に生起する特徴には、全体的な適応や健康も含まれる (無藤, 1979) と考えられ、実際、適応の測度と考えられるものを自我同一性の指標の 1 つとして用いた研究も多く (Bronson, 1959; Dignan, 1965)、同一性混乱と適応の間には有意な関連があるとみなすのが妥当であろう。

以上の点を考慮して、本研究では、砂田の実証的研究の試みをより確実なものとするため、彼が作成した同一性混乱尺度と上述した自我同一性の重要な側面の指標としての自己像間のずれとの関係、また適応の指標としての自己像間のずれとの関連を調べ、同一性混乱尺度の妥当性を検討することを目的とする。

他方、砂田 (1978) は、同一性混乱の問題を検討するに際して教養部学生のみを対象にしているが、その理由として彼らが大学受験という一定の目標をもつ高校生や専攻の確定した学部学生よりも、自我同一性対同一性混乱という青年期の特徴を典型的にもっと考えられるためであると述べており、同一性混乱は大学で最も強くなる

\* 鹿児島大学教育学部

\*\* 九州大学文学部

\*\*\* 砂田は Erikson が用いた拡散 (diffusion) という用語より中心性の喪失の意味も含まれる混乱 (confusion) の方が適切であると考えているようである。

TABLE 1 同一性混乱質問紙の下位概念と項目数

下位概念	項目数
a 時間的展望混乱	4
b 自意識過剰	3
c 役割固着	6
d 労働麻痺	4
e 同一性混乱	4
f 両性的混乱	4
g 権威混乱	5
h 価値混乱	4
i 目標の設定	7
j 自己受容	7
k 情緒的安定	9
l 対人関係の保持	8
計	65

ことを暗に示唆している。しかし藤崎(1975)は、高校生の時期は自分自身に厳しい目を向け、否定的となる時期で、同一性の確立が最も不明確であろうと述べており、研究者によって意見が異なる。そこで本研究では、このような青年期全般にわたる自我同一性の発達の推移を、砂田の同一性混乱尺度を用いて明らかにすることにした。ところで同一性混乱がいくつかの下位概念によって示されるように、その発達の推移は、単に総合得点のみでは示されない多様な側面を持つかもしれない。例えば、TABLE 1 に示された同一性混乱尺度の8つの下位概念(a~h)はそれぞれ各発達段階での課題と対応しており、a~dは青年期以前の課題の所産、eは青年期の課題、またf~hは青年期以降の課題の先駆である。それ故、同一性混乱尺度を構成するこれらの各要素は、青年期を通してその優勢となる時期が異なることが予想される。従って、総合得点に基づく分析のみならず、各下位概念ごとの発達の変容も調べることも必要であると考えられる。

## 方 法

### 被験者および調査時期

被験者は鹿児島市内の中学2年生、高校(普通高校)2年生、大学生(鹿児島大学の教養部学生)それぞれ150名で、計450名(被験者の男女比は、大学生で3:2、その他ではほぼ同数)。調査は、1980年10月-11月の期間に各学校で30分~60分を費して実施された。

### 同一性混乱尺度

1. 質問紙の作成: 同一性の発達の變容を多面的に検討するために、砂田(1979)がEriksonの示唆した部分症候に基づき作成した同一性混乱尺度(8つの下位概念からなる)とDignan(1965)の自我同一性に関する記述に従って砂田(1978)が作成した同一性混乱質問紙(4つの

下位概念からなる)の2つを合わせて計12の下位概念からなる質問紙を作成した。12の下位概念と各々の項目数はTABLE 1に示してある。全部で65個の質問項目に対して「はい」「どちらでもない」「いいえ」の3件法で反応を求め、同一性混乱の方向を示す方から2点、1点、0点とした。

2. 同一性混乱得点の分布および信頼性: 同一性混乱得点の9点間隔ごとの度数分布は、中学生、高校生、大学生ともに正規に近いことが示された。次に、異なる下位概念からなる砂田の2つの同一性混乱尺度における得点間の相関を求めたところ、0.80という高い相関が得られ、2つの尺度が1つの共通因子(同一性混乱因子)を測定していることが確認され、この2つの尺度を加算しても無理がないことが確かめられた。このことは、各下位概念の得点と総合得点との間の有意な相関(0.44~0.69)によっても支持された。信頼性係数は、50名を無作為に選び奇偶折半法で求めた。その結果、0.77の値が得られた。

### 諸自己像間のずれの測定

諸自己像間のずれの測定として、砂田と同様に長島他(1967)のSelf-Differentialを応用した諸自己像間の不一致度( $Dis = \sqrt{\sum d^2}$ )を用いた。本研究では自己像として、現在の私(以下IRと略す)、理想の私(以下II)、両親から望まれている私(以下PI)、友人から望まれている私(FI)、世間から望まれている私(SI)の5つを用い、それからIR-II、IR-PI、IR-FI、IR-SIの4通りのDisを求めた。形容詞対は12で、長島らにより中学生、高校生、大学生で得られた因子(大学生では向性、情緒安定性、強靱性、誠実性、過敏性、理知性の6因子、高校生では上の6因子から過敏性と理知性を除く4因子、中学生では理知性を除く5因子)の各々から因子負荷量の大きいものをとった(詳しくは長島他(1967)を見よ)。形容詞対の順序と方向は自己像ごとにランダムにし、7段階で評定が行われた。

## 結果と考察

### 諸自己像間のずれと同一性混乱

社会的承認の知覚の測定としての私的現実自己と社会的理想自己のずれと同一性混乱尺度との関係を検討するため、中学生、高校生、大学生のそれぞれでIR-PI、IR-FI、IR-SIのDisの大きい上位群25%(37名)と下位群25%(37名)に分け、上位群と下位群間の同一性混乱得点の平均の差の検定を行った。TABLE 2-1には中学生、TABLE 2-2には高校生、TABLE 2-3には大学生のDisの上位群、下位群における同一性混乱得点の平均と

TABLE 2-1 中学生における自己像のずれと  
同一性混乱

		IR-PI***	IR-FI*	IR-SI***
上位群	M	65.08	62.27	65.18
	SD	20.00	19.87	19.98
下位群	M	50.08	51.22	49.68
	SD	16.47	16.76	16.41

\* P&lt;.05 \*\*\* P&lt;.001

TABLE 2-2 高校生における自己像のずれと  
同一性混乱

		IR-PI**	IR-FI**	IR-SI**
上位群	M	80.24	76.23	78.19
	SD	16.31	17.49	16.91
下位群	M	61.00	65.65	65.49
	SD	14.89	15.93	14.67

\*\* P&lt;.01

TABLE 2-3 大学生における自己像のずれと  
同一性混乱

		IR-PI**	IR-FI**	IR-SI
上位群	M	65.24	64.78	61.22
	SD	20.30	21.92	21.76
下位群	M	53.30	49.86	57.73
	SD	20.57	19.08	17.14

\*\* P&lt;.01

標準偏差、それに検定の結果を示す。表に示されるように、中学生、高校生ともに全てのずれの条件で有意差が見られたが、大学生では IR-SI で有意差がなかった\*。しかし全体的には、同一性混乱とこの種の自己像のずれとの間には明らかに有意な関連がある。即ち、私的な現実の自己像と社会的な理想の自己像の差異の大きい者ほど同一性混乱得点は高い。この事実は、結局、社会的承認の知覚という同一性確立のための重要な側面を砂田の作成した同一性混乱尺度が弁別し得ることを意味している。ところで本研究で用いた社会的な理想自己という測度は、西平の用いた“青年らしさ”をもその一部として含む複合概念がある。その意味で、砂田が西平の研究に対して指摘した『自己理論が確立するまで無数にある自

\* 大学生の同一性の確立にとって、世間との関係よりも、家族、友人との関係が重要な役割を持つことを示唆するこの結果は、予想に反するものであった。

TABLE 3 IR-II と同一性混乱

		中学***	高校***	大学***
上位群	M	73.54	80.51	66.57
	SD	19.78	16.15	19.26
下位群	M	44.76	63.68	47.22
	SD	15.41	15.56	19.57

\*\*\* P&lt;.001

TABLE 4 各年齢群における同一性混乱

		中学	高校	大学
M		55.47	68.44	56.41
SD		18.91	17.53	20.25

己表象群と自己の Dis を測定しなければならない』といった問題は解消されるのではなからうか。

次に、適応の指標としての私的な現実自己と私的な理想自己のずれと同一性混乱得点との関連を見るため、IR-II の Dis の大きい上位群25%と小さい下位群25%を選び、両群での同一性混乱得点の平均の差の検定を実施した。TABLE3には、両群の同一性混乱の平均と標準偏差それに検定の結果が示されている。3つの年齢群とも0.1%水準で有意差が認められ、私的な現実自己と私的な理想自己のずれの大きい者ほど、即ち、不適応傾向の強い者ほど同一混乱得点が高いことが示された\*\*。この事実もまた、同一性混乱尺度の妥当性を示唆するものである。

#### 年齢別の同一混乱得点の比較

TABLE 4 に、中学生、高校生、大学生それぞれの同一性混乱総合得点の平均と標準偏差を示す。分散分析の結果、3群間に有意差が認められたので ( $F_{(2,447)} = 29.95$ ,  $P < .01$ ), Ryan 法により多重比較を行った。その結果、高校生の混乱得点が他の2群の得点より有意に高いこと ( $P < .001$ ) が認められ、同一性混乱は中学生頃から増大し始め、高校生の時期に最も顕著となり、その後減少するといった一般的傾向が示唆された。これを支持する結果は、他の研究でも得られている。例えば、Thomson (1963) の17歳~22歳にわたる年齢群での研究では自我同一性は年齢の上昇に伴い増加することが、また古沢 (1968) の研究では自我同一性得点は中学生1年、2年、高校の順に減少することが認められており、これらの結果を結合すると、やはり本研究の結果と同じ発達の推移

\*\* 中学生のこの種の自己像のずれを必ずしも不適応のサインでないとする意見もあるが、本研究の結果は、間接的にはあるが、この主張と両立しない。

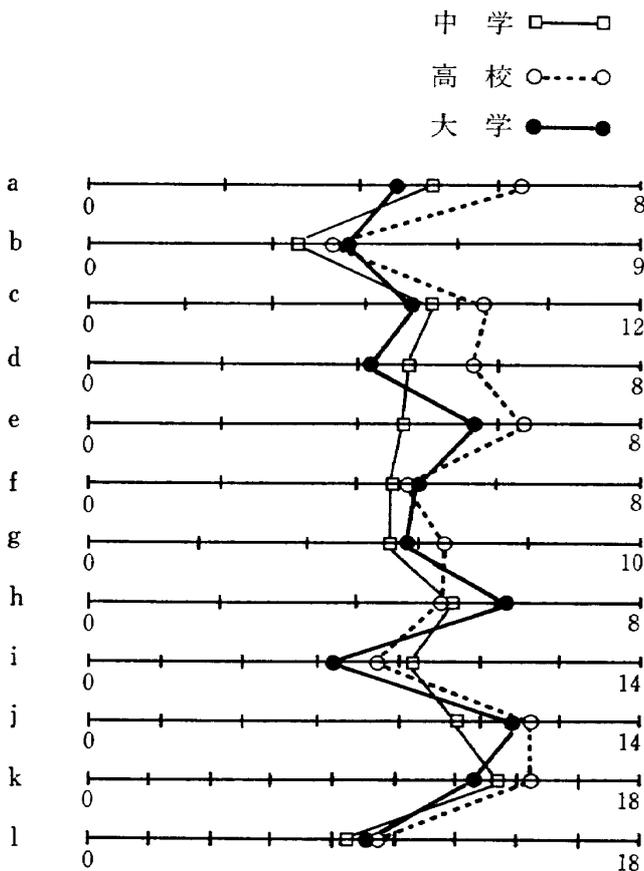


FIG. 1 同一性混乱尺度の下位概念ごとの得点 (a-lに対応する下位概念はTABLE 1に示すとおりである)

が示唆されよう。

次に、混乱尺度の各下位概念によりその優勢となる時期に差異があるかどうかを検討するため、中学生、高校生、大学生のそれぞれで同一性混乱得点上位群25%をとり、12下位概念毎の年齢群間比較を実施した。FIG. 1には各下位概念毎の年齢別平均得点を示す。分散分析の結果、a 時間的展望混乱、c 役割固着、d 労働麻痺、e 同一性混乱、j 自己受容の項で1%水準で有意差が、またh 価値混乱、i 目標の設定の項では5%水準で3つの年齢群間に有意差が認められたが、f 両性的混乱、g 権威混乱、k 情緒的安定、l 対人関係の保持の項では有意差は認められなかった。そこで発達段階との対応のあるa~hの内、有意差のあった下位概念のみの多重比較を実施したところ、a、c、d、eの各項では高校生が他の2群より有意差 ( $P < .05$ ) または傾向差 ( $P < .1$ ) をもって高い混乱得点を示し (a、eの項では中学生と大学生との間にも有意差が認められた)、hの項では大学生の得点が他の2群より高い傾向が認められた。発達段階との対応のない下位概念での多重比較では、iの項で中学生の得点が他の2群より高い傾向が、逆にjの項では中

学生が有意に低いことが認められた。以上のように各下位概念毎の分析でも、全般的に高校生の段階において同一性混乱が高くなることを示している。しかし下位概念によっては、その顕著な出現時期が、対応する発達課題固有の時期と関連して、ある程度異なることも認められる。例えば、青年期以前及び青年期の発達課題の所産であるa~eの項の得点は大学生より高校生が高いが、成人期の課題の先駆であるf~hの項では差がないか、むしろhの項では大学生の方が強い混乱を示している。そしてこの価値観は、Mercia (1966) が後期の青年が傾倒すべきものと指摘したものである。またaの項では大学生より中学生が、青年期の発達課題及び青年期以降の課題の先駆であるe、hの項では逆に中学生より大学生が高い混乱得点を示すのも、下位概念の優勢となる時期が、対応する発達段階と関連のあることを示す例かもしれない。

## 要約

本研究では、砂田の作成した同一性混乱尺度を中学生、高校生、大学生を対象に実施し、青年期における同一性混乱の発達の変容を検討すると同時に、長島らのSelf-Differentialを応用して測定した諸自己像間の不一致度と同一性混乱尺度との関連を調べることで、砂田の作成した同一性混乱尺度の妥当性を検討した。

本研究で得られた結果は次のとおりである。

1. 同一性混乱尺度での総合得点は、青年期をとおして高校生が最も高い。
  2. 同一性混乱尺度の各下位概念は、青年期をとおしてその出現が顕著となる時期にある程度差異が認められる。
  3. 自我同一性の重要な側面に関する指標としての私的な現実自己と社会的な理想自己のずれの大きい者ほど、高い同一性混乱得点を示す。
  4. 適応の指標としての私的な現実自己と私的な理想自己のずれの大きい者ほど、高い同一性混乱得点を示す。
- 〈付記〉本論文の作成にあたり、データの収集ならびに処理に御協力下さいました関山明美嬢に心から感謝致します。

## 引用文献

- Block, J. 1961 Ego identity, role variability and adjustment. *Journal of Consulting Psychology*, 25, 392-397.
- Bronson, G. W. 1959 Identity diffusion in late adolescence. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 59, 414-417.

- Dignan, M. H. 1965 Ego identity and Maternal identification. *Journal of Personality and Social Psychology*, 5, 476-483.
- Erikson, E. H. 1959 Identity and the Life Cycle; Selected paper. *Psychological Issues*, 1(I). 小此木啓吾(訳) 1973 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル— 誠信書房
- 藤崎真知子 1975 Identity I-E Control との関係 日本心理学会第39回大会発表論文集
- 古沢頼雄 1968 青年期における自我同一性の形成と親子関係 依田新(編) 現代青年の人格形成 金子書房
- 加藤隆勝 1960 自己意識の分析による適応の研究 心理学研究, 27, 53-63.
- Mercia, J. E. 1967 Ego identity status: relationship to change in self-esteem, "general maladjustment." and authoritarianism. *Journal of Personality*, 35, 119-133.
- 無藤清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究, 7, 178-187.
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀洋道 1967 自我と適応の関係についての研究(2): Self-Differential の作成 東京教育大学教育学部紀要, 13, 59-84.
- 西平直喜 1970 青年の自我同一性に関する研究(その1) 日本教育心理学会第12回発表論文集
- 砂田良一 1978 自我同一性に関する一研究: 質問紙法を中心にして 愛媛大学保健管理センター年報, 35-53
- 砂田良一 1979 自己像との関係からみた自我同一性. 教育心理学研究, 27, 215-221.
- Thomson, M. 1963 Modification in identity: A study of the socialization process during a sister formation program. Unpublished doctoral dissertation, University of Chicago. "Dignan, M. H. (1965) より引用"

(1980年11月25日受稿)